令和六年度　中学生の「税についての作文」
沖縄国税事務所長賞　「痛税感」という言葉を知って

学校法人尚学学園
沖縄尚学高等学校附属中学校学校　親盛　心怜

先日、私は両親から給与明細を見せてもらった。両親は、給与明細の所得税や住民税の欄を指さし、「税金が高くて困る」と言った。税金のせいで手元に残る給与がかなり減るらしい。

税金は、学校、道路、社会福祉など様々な公共サービスに利用されており、社会を維持するために必要なものだと学校で教わった。そのため税金が多少高くても私達の暮らしを支えているのなら、不満に思うことはないのでは、と両親の話を聞いて疑問に思った。

この話をきっかけに税金について調べていると、「痛税感」という言葉を知った。「税をどのくらい負担に感じるか」という意味らしい。日本は欧州の国々と比較すると、税の負担額は小さいものの「痛税感」は高いと言われているそうだ。私はその原因について、公共サービスは当たり前に受けられるもの、という考えからきていると思う。実際は税金で成り立っている公共サービス。しかし私達国民からすると当然のように利用できるので、当然に利用できるものに対して税金という形で負担したいとは思えないのではないか。

もし、普段通学で利用する道路や急病の時に使う救急車が有料だとしたら、利用しにくくなってしまう。また、病気になったときに補助がないと、高額な医療費がかかってしまう。そのようなことなく、誰もが等しく公共サービスを受けられるためにはやはり、税金の負担は必要なのだ。

欧州の国々では、日本よりも税の負担額は大きいものの、それに見合う公共サービスを得られているという実感があるらしい。その一方で、日本は満足のいく公共サービスを受けている実感があまりなく、それが「痛税感」につながっているのかもしれない。それなら、例えば、「この〇〇は皆さんの税金でできています」と税金でできたものの横に、税金で作られたことを表現するとか、税金により安くなったサービスがあれば、それを国民に分かるようにアピールするなど、税金の使い道が目に見える形で分かるように工夫する方法もあると思う。

税金は私達の暮らしを支える大事な財源であることを頭に置くことと、私達が税を負担することで公共サービスが受けられているという実感がもてるようになれば、「痛税感」を感じにくくなると思う。そしてこれは、国民の満足度が上がることにも繋がると私は考える。